



FUKUSHIMA 市民インタビュー

このコーナーでは、福島市のさまざまな分野で活躍する人や団体を紹介します。今回は、全ての人々が読書を楽しめるようにと市立図書館開設前から活動を続けている「図書ボランティアの会」代表の中西郁子さんにインタビューしました。

活動のきっかけは？

私は、夫が転勤族で引越しが多かったのですが、どこに行っても最初に図書館へ行き、本を借りてその町の情報や歴史を知ることから始めていました。社会福祉協議会のボランティア講座を受講した時に市立図書館ができると聞き、修了生有志でぜひお手伝いを、と申し出ました。

活動内容は？

市立図書館の開館は昭和60年ですが、その2年前に市立図書館開設準備室で始めた図書整理活動がきっかけです。

私たちは、①図書修理



▲図書ボランティアの会の皆さん(前列中央:代表の中西郁子さん)

は、毎週土曜日に開いている「おはなしのかい」や毎月第3木曜日の「おひざにだっこのおはなしかい」、病院や学校での読み聞かせや人形劇などを行っています。⑤対面朗読班は、視覚障がいの方に朗読や朗読劇を行うほか、図書館から遠い小学校を訪問しておはなし会も開いています。④手でさわる絵本班は、視覚などに障がいがあるお子さんが、絵にさわってお話を楽しむために点字のついた布の絵本を製作しています。誰でも一緒に楽しめる絵本として、現在330冊が市立図書館に

班、②読み聞かせ班、③対面朗読班、④手でさわる絵本の班の4つの班で自主的に活動をしています。図書館の本、紙芝居の修理を行う①図書修理班は、市内の学校や施設の本の修理も行っています。②読み聞かせ班

所蔵されています。

▼印家に残っているごほう

3年前に、手でさわる絵本の蔵書が300冊を超え、もっとたくさんの方に知ってもらおうと「300冊展」をこむこむで開きました。震災後は、図書館に子どもたちの姿が本当に少なくなっていたのですが、お父さんお母さんたちが予想以上に熱心に、お子さんと手でさわる絵本や遊具で遊んでいました。またその方たちがSNSで呼び掛けてくださったり、うれしいお手紙もいただいたりと、思いがけない反響の広がりや温かさを感じました。絵本の美しさとお話の楽しさを多くの方に感じていただけてうれしかったです。

▼今後の活動は？

子どもたちが本を読む楽しみや喜びに気付いてくれるように、私たちもできるだけ良い活動をしていきたいと思っています。また、読み聞かせやお話の場、手でさわる絵本に触れる機会をもっと増やしていきたいです。ぜひ図書館に足を運んでいただき、実際に私たちが行っている読み聞かせやお話を体験してください。



We Love ♥ ふくしま！

第5回『読書の思い出』

6月号の特集は「図書館の利用促進」。これを語れるほどの読書好きではありませんが、読書の思い出を綴ってみます。

私は、小学生の後半から中学にかけて、スポーツに熱中してしまって、読書は全くなくなっていました。

転機となったのは高校入学後。新しい友人たちがすごいスピードで本を読み、自分にはまねができない文章表現をするのに接して、カルチャーショック。私の読書生活はそこから始まりました。

古典的名作、推理小説、新書もの…さまざまな分野の本を乱読しましたが、本の世界の豊かさにすっかり魅せられてしまいました。

私が影響を受けた本と言えば、まずは「さんごくしえんぎ三国志演義」と「しよかつこうめいキッシンジャー回顧録」。諸葛孔明やキッシンジャーが常識にとらわれず手段を尽くししんしゅつぐいめい神出鬼没に動く意志と行動力は、自分

の人生モデルの一つになっているような気がします。

もう1冊は三島由紀夫の遺作「ほうじょう豊饒の海」。読後、青春期ならではのさまざまな迷いが、なぜかす〜っと消えてしまいました。

子どもの頃の読書習慣は家庭環境に大きく左右されます。わが家では、子どもが乳児の時から毎日本を読み聞かせていました(一応私が主担当)。そのためか子どもは本が大好きで、私より速く本を読めるようになったのには驚きました。もっとも中学生の後半からは私と同じでスポーツに熱中し、読書習慣の貯金を吐き出してしまったようですが…。

教育格差が世代を超えて拡大する世代間連鎖が危惧されています。それを断ち切る有力な手段の一つが、読書だと私は思います。

行政としても読書の一層の促進に努めます。家庭においても子どもたちの読書を助けてあげる、あるいは家族も静かに本に向き合って読書環境を作ってあげる、そういう取り組みをお願いいたします。



福島市長 こはた ひろし 木幡 浩